

「くあ……っ……くんっ……くう……くふっ……！」

粘つくく生暖かい粘膜で敏感な尻を布腰とはいえ揉み込まれるのにはひどい羞恥心と、嫌悪を感じる。あまりの気色悪さに全身に鳥肌が立ちそうだ。

「け、穢らしい……！」

しかし壺の動きは止まらない。今度は全身をマッサージ……いや、扱き立てるようにして足のつま先から乳房までをぎゅっ、ぎゅっ、と絞り立ててきたのだ。

「んぐ、く、はっ！」

それほど強い締め付けでは無いと言え、エルシアの顔が真っ赤になる。一瞬とはいえ魔姫との激しい戦闘で開いていた全身の汗腺に液体を無理矢理に染みこまされているのか、急激に身体が火照った。さらに擦られたところからぴりぴりとした不思議な電流がわき起こる。

(なん……ですの、これ……?)

しかしそれは不快な物ではなく、むしろ心地よさを伴ってさえいた。

「はっ、はっ、はっ……！」

締め付けが乳房の下あたりに来たときにはいつしかエルシアの息は荒くなり、ほほが桜色に染まり始めていた。

そして、薄い胸に粘膜壁がぎゅっ、と押し付けられる。

「んんんんんっっ!!」

胸の先端で軽い爆発のような物が起こったような感触がした。続けて今まで意識などしたことも無かったサクランボのような乳首が硬くしこり立ち始め、ジンジンと甘辛い疼きを持ち

始める。

「ふふ……感じてきた？ イヤらしくなってきた？」

そこまでファルアに言われてエルシアははっと気づいた。自分は今『陵辱』を受けているのだ。

聖姫はまなじりをつり上げてファルアをにらみつけると、

「このような物でわたくしをどうにかできると思ったりしないことです！」

と強く言い放つ。

しかしそれでもファルアは余裕綽々だった。

「いつまで続くか、楽しみ」

その言葉を合図にするかのように、壺状生物の行動が活発化した。

粘膜壁の内側から新たな触手が現れたのだ。そのゼリー状の形ある液体は表面にびっちり粒のような物を生やしていた。例えるならばカエルの卵に似ている。

「……！」

その奇妙な姿を見せつけられただけで生理的嫌悪感に身を震わせてしまう。が、外では宿敵が自分の姿を眺めているのだ。みっともない格好は見せられない。

奥歯を噛んで震えを止めていると、触手は大胆な行動に出始めた。

Aカップはあるかないかという乳房に粘体ならではの柔軟さを活かしてきゅっ、と巻き付いたのだ。

「ひあっ!？」

聖姫の小さな身体がビクンと震えた。胸にぬめりと巻き付か

れ、ぶるぶるしたイボで肌を布ごしに擦り上げられる度にピリピリとした電流のような物が産まれ、胸全体に広がっていく。もう片方の胸にも同じ事がなされた。こんどは幾分強くぎゅつと潰されるようにへこまされる。脂肪がペコンとへこんだ部分からぼうつとした甘い熱が産まれ、乳房の芯に甘い火が付いた。両の乳房はピン、ピンと硬くしこり立ち、水でぐっしより濡れたバトルドレスの下からその存在を主張する。

もちろん触手がその存在を見落とすわけは無かった。蛇のようにとぐろを巻きながら乳房を這い上ってきた粘体生物は、コリコリになったピンク色の肉豆をふちゅつと吸い上げるようにして締め上げる。

「ん、ん、んんんーっつっつ!!」

乳首が弾けそうなほどの愉悦が乳頭から産まれ、乳房の芯を貫いた。甘く、激しい刺激にエルシアの顔が思わずのけぞり返り、くぐもつたうめき声を上げてしまう。

(ああ、ああ……こんな……おっぱいが……熱くて……)

その反応に気をよくしたのか、触手は右の乳房には強い揉み込みと撫でるように優しい乳首責めを、左の乳房にはその反対の責めを繰り返していった。

「んむうーっつ!! んん、くふう、うううーっつ!!」

きゅつ、きゅつ、きゅうつと優しく、そして強くもみ抜かれる度に熱に浮かされたように真っ赤になったエルシアの頭が左右に揺れ、長い紫の髪が水の中で蠱惑的に揺れる。

「そんな調子じゃおぼれてしまう。でも、私は優しいからそうならないようにしてあげる」

水の中でほとんど初めてといえるような快樂に翻弄されているエルシアを目を細めながら楽しそうに眺めていたファルアが指令を下した。

すると、ちょうどエルシアの半開きで股の間に、粘膜壁から触手が伸び始めたでは無いか。

材質こそ同じだが太さと長さは乳房を責めている物とは大分違い、幅は大体聖姫のバトルドレスから透けて見える恥骨の幅ぐらいに太く、長さは壺状生物の背中から表までを一直線にっていないでいる。

「うふあ……んはっ!？」

股をヌメツと舐められた聖姫はその異常な状況に気づいて何とか身を浮かべようとしたが、ガントレットは粘液に滑り、両脚は触手に捉えられではどうにも出来なかった。

そして両脚の触手がぐつと姫の身体を引っ張った。

——くちゅつ。

「つくふう……!」

ぎゅうつと押し付けられて大陰唇がわれ、その奥充血を始めていた小陰唇にぶるぶるした触手が密着した。

まるでいくつもの小さな吸盤に吸い付かれるような奇妙な感触。だが気持ち悪くは無く、熱く蕩けるような不思議な刺激に聖姫は背を仰げ反りかえして悶えるほか無かった。

股間から薄く白みを帯びた液体がこぼれだし、周囲に溶け込んでいく。

太い触手がエルシアの股間を削るように前後運動を開始した。



た。だというのに肉棒には間断なく痛気持ちいい刺激が注ぎ込まれてくる。

(いやあああつつつ……だめ、このままじゃ、私のクリが、くりがあああ……!!)

「だめつつつ!!! もうダメつつつ!!! お願ひ、出させて!!! 私の、私のあそこから出させて、どくどくさせてええええつつつ!!!」

ついに半狂乱で泣きわめき始めた明利を見て鬼はにたあつと笑った。

「なら、お姫様の所へ案内してくれるな?」

「姫……」

一瞬明利の混濁した脳裏に自分が使える姫の顔が浮かんだ。いつも元気で明るくて、そして凛々しい。消耗品扱いされる謀者である自分の身すら心配してくれる慈愛。どんな逆境でも諦めない強さ。命を賭けても守り抜きたい、愛していると云っても過言では無い主君……。

「だ、だめっ、それだけはだめ……」

頭をぶんぶんと横に振る明利の頭をがしりと押さえつけると、鬼は肉竿をゆっくりしごき立てながら耳元でささやいてくる。

「お前のそのいきり立ったイチモツを、姫にぶち込んでみたくないか……?」

「え……」

明利の心臓がドキリと鳴った。

「突っ込んで、そのたまりにたまった物を姫の中にはき出して

みたくないか……え……?」

耳元で催眠術のようにささやき、さらに肉棒をゆっくり、優しくしごき立てて甘い刺激を与えてくる。この責めに、さしもの明利も抗えなかった。

「はい……」

蕩けた目をして、ゆっくりと頭を縦に振った。

「はっ……はおうつつ……! や、やめよ明利……! いつものお主は何処へ行ったのじゃ……! 目を、目をさま……! はおおうおうつつ!!」

『鬼退治』の頭領である金城信美はあつけなく鬼の手に墮ちていた。

限られたごく一部の者しか知らないはずの総本山への直通路の結界を破られ、無数の鬼が急襲してきたのである。

完全に虚を突かれた形になった金城家の従者達は次々に敗れ去った。男は傷つきとらわれの身となり、戦巫女達は陵辱の憂き目に遭って本山は酸鼻を極めていた。

「ああ姫……姫様の中で最高でございます……! 暖かくて、ヌルヌルしててキツキツで……。明利、もう持ちませぬう……」

夢見るような顔でそう言うと、明利はひとときわ強く信美の尻に腰を打ち付けた。

「どすんっ! びゅくうつつ!!! びゆるるるるうつつ!!!」

「おあああつつつつ!! おぐつつ、おぶう……げ……うえええええつつつつ!!!」

